

## フーパー夫妻の『デ・レ・メタリカ』

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

先ごろのニュースによれば、我が日本における理系分野の学生に占める女性の割合はOECD（経済協力開発機構）加盟国中最下位だそうである。自然科学分野の加盟国平均が52%であるのに対して日本は27%、工学分野では加盟国平均26%に対して16%で最低という。製造・建設現場を抱える工学分野が自然科学分野に対して約半分というのも、当然と言えば当然か。筆者の学生の頃は重厚長大産業が大きく進展した時期で、工学部機械工学科で自身が所属した研究室などはその中心的存在の一つであったが、日がな一日、グラスウールや機械油にまみれての配管作業、装置が出来上がれば徹夜の実験の繰り返しで、およそ当時の女性が好んで入ってくる環境ではなかった。

今度はGlobal data on national parliamentsのデータを再集計してみる。すると、我が国の国会議員に占める女性比率は14.4%で世界平均25.5%に対して約半分。仏伊独英が37~30%、米27%程度と比較して、これまたかなり低いのは間違いない。英独などは女性の首相を選出し、いずれも長期にわたって政権を維持しただけでなく世界的にも大きなインパクトを与えた。少なくとも知的分野で男女両者に差がないことは明らかである。

最近の脳科学の研究によれば、頭の中（外科的ではない）は9割の人がモザイク状で男性的、女性的な要素が入り混じっているという。したがって各種能力もモザイク状で、特に男女で向き不向きがあるわけではない。幼児期からの環境や刺激によって嗜好や感覚が成長と共に変化してくるのだそうだ。

嗜好という点では、現在、筆者は非常勤講師として留学生に対する入学前教育の物理を担当しているが、受講する女子学生たちの話がおもしろかった。彼女たちはベルギーやニュージーランドなどで高校教育を修了した帰国子女だが、彼の国では理科科目は2科目選択で化学と生物を選択し、物理など全く学んでいないとのこと。技術分野はもちろんのこと化学分野でも多少なりとも理解が求められるはずの物理は、我が国のみならず海外においても疎まれる傾向にあるらしい。統計とはその内実を覆い隠して表面上の数だけで評価するものだから、最下位だ、10番だなどと大騒ぎするほどではないとの見方もあるが、物理が必須の工学部機械工学科、電気工学科などを目指す学生の統計をとれば、実はもっともっと比率は下がり、絶望的な数字となるであろう。もっとも、かつておもちゃや昆虫に目を輝かせた子供たちが、いまやデジタル技術の粋を集めたバーチャルゲームにうつつを抜かず時代である。そうして育ち、スマホ経由で友人と会話をする高校生が、面倒な物理などにまともに取り組みたくないというのは、考えてみればさもありなんである。

さて表題の書物だが、1556年刊のGeorgius Agricolaによる採鉱冶金に関する古典中の古典である。原書はラテン語で、1912年には非常に丁寧な解説が付いた英訳が英国で出版された。英訳者はHerbert Clark HooverとLou Henry Hoover。後の31代米国大統領夫妻だが、Herbertは米国鉱山学会、米国鉱山・冶金学会、Louは米国科学振興協会、米国地理学協会などに所属する研究者であった。技術にはハードだけではなく、社会や歴史、地理さらに人や社会に対する広くて深い見識が

不可欠である。きっとこの夫妻は男女の別なく研究者同士として、互いの専門を尊重し合って存分に生かすべく協力体制を組み、この貴重な図書の英訳という歴史に残る重要な仕事に挑んだのだろう。

我が国でもそろそろ理系文系という枠組みを取り払って、男女の区別なく適材適所で社会、文化、技術、もちろん科学も支える未来を描きたい。とりわけ将来を担う技術者、意欲のある技術者・研究者が必須の折、子供たちや高校生に男女の区別なく科学・技術分野に大きな夢や希望を見出してもらうには、そしてその道をめざす若者を増やすにはどうしたらいいのだろう。そのためには、ランキングや%に拘泥せず、また大学においては女性教員比率を30%とするなどといった数合わせの対策だけで済ませることなく、時代をさかのぼって、今ある姿を見極め、将来あるべき姿を描くことではないか。そんな丁寧な議論が展開されることを期待している。

